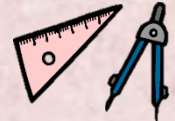




# 算数・数学部報



## 「主体的な学び」と「指導案のあり方」について

岡崎市現職研修委員会算数・数学部

部長 高須 亮平

「主体的・対話的で、深い学び」という言葉が、教育現場で頻繁に使われるようになり浸透していることが分かります。実際には、そのような授業が展開されなければなりません、皆さんの学校ではどうでしょうか。ある、こんな会話がありました。

「子どもの主体性を育てるため、教師は支援に徹し、ひたすら認めてほめますよ。子どもも喜ぶから」

「まあ、喜ぶでしょうね。で、その後、どうするのですか」

「子ども同士で発表し合って、認め合って、というような相互評価っていのを」

「その後は」

「いや、それですべてです。それで終わりです」

「すると、子どもが何に着眼しても、何を持ち込んでも、授業が終わるまでそのまま？何も変化ないのですね」

「そうなりますね」

「指導はしないのですか。その子の着眼を盛り立て、気付きを深めたり理解を広げたりするような」

「教師の思惑に引き込んでいいのですか。子ども主体だから、へたにひん曲げてはいけない」

もちろんひん曲げてはいけません。しかし、適切に盛り立てて、子どもだけでは気付けない、出会えない、価値ある内容に誘ってもいいと思うのです。いや、そのために教師がいるのですから。

最近、働き方改革からか、教師の力量不足からか、指導案はスカスカになってきていませんか。子どもの多様性を認め、一方的な決めつけや追い込みをしないという美名の下、重要なことがどんどん書き込まれなくなってきています。その結果は、子どもの追究を予測することの放棄であり、指導の欠如につながっているようです。

むしろ逆であって、しっかりと子どもの追究の道筋を書き込むことで、子どもの意外な姿に目が止まり、適切な声かけや支援ができるのです。それであってこそ、子どもは主体的によりよく学び育つのです。当の子どもも満足するでしょう。それ以前に、書き込むためには一人一人の子ども的事实をきちんと把握しなければなりません。

かつて、書き込んだ通りに子どもを動かそうとした時代がありました。それへの反省は忘れてはいませんが、書き込むことそれ自体と、書き込んだ通りにしようとすることの誘惑に打ち克つかは、別の問題なのです。そのような理解の上で、もっともっと精緻に計画を立て、指導案を詳細に書き込むことが求められます。特に、主体的な学びを求める授業の指導案であれば、子どもの追究の道筋を予測して、その思考の流れを丁寧に書き込むことが必要になります。それでなければ、子ども主体の授業とは言えないでしょう。

そして、子どもと向かい合う授業では、前日までにしっかりと考えたことは、きっと授業者の身に染みこんでいて、それが本当に必要な時に、子どもの姿に誘発される形でタイミングよく発動されることでしょう。教師の技とはそのように繰り出されるべきものであり、そのように繰り出された技こそ、対象となった子どもの学びをもっと的確に支えるものとなると思うのです。



## 授業研究会

6月9日(土)に、授業研究会が梅園小学校で行われました。「文章題の指導において、子どもが主体的に学ぶ授業」をテーマに、前算数・数学科指導員で、額田中学校主幹教諭の永井利昌先生が小学2年「なんばんめ」の授業を公開しました。その後、パネルディスカッションでの協議会を行いました。また、フロアからの質問・感想も多く出されました。最後に、三浦鎌次先生からの講評では、教師がいかに関業をコーディネートするかについてのご指導をいただきました。休日ではありましたが、100名もの参加者で、とても有意義な研修を行うことができました。会場を提供いただきました梅園小学校に感謝申し上げます。



### 【授業研究会参加者の感想】

『文章題の指導において、子どもが主体的に学ぶ授業～子どもの問いを軸にした授業の構想と実践～』という研究テーマの授業を見させていただきました。低学年で文章題を扱う際に、念頭だけで考えさせず、動作化したり数図ブロックを操作させてみたりすることがよくあると思います。今回の授業では、意図的に最初から図などを与えることはせず、子どもたちが式で考え、発表していく中で重なって数えてしまっている状況が生じることに気付くことをねらわれていました。子どもたちも図を使うとうまく説明できると納得している表情でした。図を使うことのよさを子どもたちが実感できる内容だと感じました。

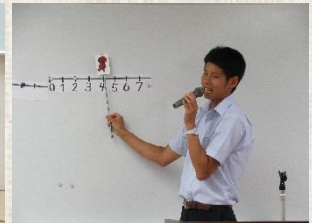
協議会では、①見通しは、教師がどこまで示すか、②ただ一人正解を導いた子の考えをどう生かすか、③教科書で取りあげられている4つの問題をやる時間をどう確保するか、④念頭だけで問題の意味が伝わったか、⑤課題の設定の仕方、⑥順序数と集合数の扱い、⑦この問題提示の仕方です子どもたちは問いがもてるかといった視点から意見が出され、議論が深まりました。教材研究をさまざまな角度から行うことの重要性を改めて感じました。すぐに真似できることではありませんが、子どもの意見を把握し、授業で有効に生かす様子はとても勉強になりました。また、子どもが疑問をもてるように学習問題を設定され、予想とのずれを生かしていく点はとても興味深かったので、今後の授業に取り入れられたらと思います。

(羽根小 鈴木 利依)

## 第2回読書会

6月22日(金)に第2回読書会が総合学習センターで行われました。

『研究的実践より学ぶ』というテーマのもと、梅園小の井畑絵美梨先生と葵中の田中勇至先生の実践発表が行われました。井畑先生の発表では、小学4年で学習する「面積」の単元を「わなげゲーム」の実践を通して、主体的に学び、筋道を立てて考える児童を育成する内容の発表でした。田中先生の発表では、中学1年「正の数・負の数」の単元を、葵中のマスコットキャラクター「あおいぬ」を数直線上で動か



し、視覚的に操作することで、正しく計算できる生徒を育成する内容の発表でした。どちらの実践も、単元を通じた構想がなされ、児童・生徒の意欲が持続する授業の実践でした。参加者の先生方からも、ご自身の授業での経験を振り返りながらの積極的な意見交換がありました。

### 【読書会参加者の感想】

梅園小学校の井畑先生の実践からは、「わなげゲーム」を通して自ら考え、それぞれの方法で結果を調べていくことで、主体的な学びが生まれるゲーム活動のよさを学びました。面積という新しい概念を形成していく際に設定した「自分の考えをもつ場」、「学び合いの場」が子どもの主体的な姿につながったように感じました。

今回の三浦先生のご助言の中には、扱う素材は「簡単・的確・明瞭」でなければ混乱を招くというお話もありました。教師が難しく教えてしまうことのないように、この3原則のもと、算数・数学を主体的に学ぶことができるように授業づくりに励みたいと思います。

(大門小 沓名 和貴)

読書会の詳しい内容につきましては、算数・数学ホームページ  
<http://cms.oklab.ed.jp/sugaku/index.cfm/1.html> をご覧ください。